

『色取り』

君と話していると、気分の色が変わるんだ。

水色かな。

青春ならこんな色だろうか。

でも、もう少しだけ夜の輝きを纏ってる。

じゃあ桃色だって？

穏やかな陽の色。

でも少し、寂しさを感じるんだよ。

なら白かい？

両手から溢れそうな日々。

さあ。まだわからないんだよ。

あれ？

君の名前は、なんだっけ

おにぎり

創文手帖 目次

巻頭詩

「色取り」

おにぎり……一頁

短歌・俳句『月』

……五十三頁

文芸散歩録

……五十九頁

小説『お伽噺』

「幼少のお伽噺より」

「憧れ」

「夢見心地」

「あの日、月に帰ると言った」

「鬼」

「親子」

闇鍋

「眠眠打破」

おとり草氏……六十七頁

詩『名前』

「しおり」

「名付け親」

「監獄」

「曖昧な名前より」

及川まよ……四十七頁

狭野方花……四十八頁

綴歩……四十九頁

雲霧林……五十頁

雲霧林……四頁

狭野方花……九頁

花火……十七頁

美陽花……二十三頁

池水喜美……二十九頁

綴歩……三十九頁

雲ひとつない空に太陽は燦々と輝いている。

「いじょう」は（委譲）で「うりあげ」は（売上）

ある夕暮れの方のことである。

「名前を忘れちゃったんだよ」

プリンセス「約束」

昔々あるところに

額には白い角がある。
ハッピーエンド

それが母であつたと理解するのに
ずいぶん時間がかかった。

しやりしやりしやりしやり

しやりしやりしやりしやり

あ、かき氷食いたい。

マ
—小説—
—お伽噺—

『幼少のお伽噺より』

雲霧林

「あー……学校いきたくない……」

夏休みはもう終わったのに、九月ってなんでこんな暑いんだよ。頭痛くなるし、汗かくと気持ち悪い。あとたぶん、さぎょーこーりつつやつがあんまりよくない。知らんけど。

下を見れば砂利まじりの土の道。上を見ればやけに角度をつけて眼球を刺してくる朝日と、青すぎるくらいに青い青空。ウィズ真つ白い入道雲。うん、英語はオッケー。今日の小テストもモーマンタイ。あれ、モーマンタイって、英語だったよな。まあ、いつか。あ、かき氷食いたい。

暑いなあ、って思ったから、乗っていた自転車を下りて、人目につかなさそうな道の脇の木陰に移動する。からから、からから、ちよっと古い相棒からは、錆びまぐった見た目とは反対に、そんな可愛らしい、どこか間の抜けた音が鳴ってくる。このまま休んだら、怒られるだろうか。いや、まあ大丈夫か。少しだけ申し訳なさはあるが、陽キャで要領もいい幼馴染がなんとかしてくれるだろう。先に謝っておこう。ごめん。みじんもそんなふうには思っていない

けど。

木陰でみつけた獣道を、からから、からから、登っていく。だんだん空気のひんやりと体の熱さがちよつとよく混ざってきて、快適になってきた。ふと目に留まった小さな木でできた建物の方に行くと、周りがしんとしていて、不思議と居心地がいいと思った。コケだらけの石みたいな祠が中であつたから、よく読めない文字を見ようと思つてほんの少しだけ近づいた。

「えー……あー……」

なんだこれ。意味がわからなさすぎて、さっきまで忘れかけていた暑さのせいの頭痛も痛くなってきた。うーん、と唸ってから建物の近くに自転車を停めさせてもらって、その近くのちよつといい岩の上に座つた。何が起るかわからないから、建物に入るのはやめておいた。なんとなく、あんまりそういう無遠慮な行動をするのはよくない気がした。というのも、ぼくの暮らしている地域には、どうやら神様がいらっしゃるらしい。そのときはあんまり話を聞いていなかったけれど、めっちゃきれいな神様なんだっていうのは記憶に残つてる。けど誰も会つたことがないから、実際にはどんな神様なのか、どんなことで喜ぶのか、どんなことで怒るのか、なんにもわからないらしい。でも、お母さんもお父さんも、たまにすごく真剣

な顔で、ぼくに「全てのものは神様がもたらしてくれたものだから、誰のものかわからないものは触っちゃいけないよ」って言うから、大事なことなんだろうなあと思った。触ただけで怒るとか、どういう神様だよ。心狭すぎないか？ そんなんで神様って、ちょっとなあ。

「おや、こんなところでどうしたんですか？」

やわらかい声。無視した方がいいよな、こういうのって。大人たちの教えその二、「よくわからないものが見えたり話しかけてきたりしても、見ない、答えない」。でもこの言い方だと結構猿みたいか。えーとあれ、あのとーしょーぐー、みたいな。なに県だったかな、ぐんまかな。うーん、でも今は、遅刻しそうになって朝ご飯を食べ損ねたのと、ここまで登ってきた分で、結構おなかが減ったかもしれない。そう思った瞬間に、ぐう、とおなか鳴った。くすくすと笑う声が隣から聞こえる。

「なあんだ、おなかが減ってるんですか。てっきり中学生が自分探しかなかでもしに来たのかと思っちゃいましたよ」

なんだこいつ、と思ったけど言うのはやめておいた。あんまりそういうのって初対面の人に言っちゃいけないやつだ、たぶん。というか、

自分探してなんだろう。だって、自分はここにいるしな。現在地着いてるやん。あ、もしかしたら夢的なやつか。夢かあ、まあ宇宙飛行士か、それか深海か。宇宙船とか潜水艦とか、ちょっとやっぱ憧れる。絶対無理だけど。

「へえ、素敵な夢ですね。俺は……なんだろう、え、なんだろう。まあそれはどうでもよくって。ねえ、あなた、俺の声聞こえますよね」

しばらくは無視していると、神様とは思えないフレンドリーな口調で文句をピーピー言ってくるから、うるさいなあ、と思って、仕方ないからそっちの方を向いてやった。ずっと喋っていたそいつは隣にいるのにどこかぼやけていて、さっきの石に書いてあった文字みたいな感じがした。

「……なんなん、おまえ。大人たちが言ってた神様？ ぼくなんか、たぶん食ってもおいしくないよ」

「えー、俺そんなふうに思われてるんだ。まあでも、神様は人を取って食ったりはしませんよ。ほんのたまに、気に入った人間と友達になるだけです」

「お母さんが、それ『かみかくし』って言うんやって教えてくれた

よ。かみかくしされたら、戻ってこれないんやって。ゲームできんくなるんはいややし、それにおまえさ、ぼくと友達になっても絶対楽しくないぞ」

神様は小さく息をついて、うすく笑った。それから、「俺はあなたのことを気に入っただけで、まだ隠してないですよ」とも言った。絶対嘘つきやん、こいつ。だってなんか、笑い方が嘘つきっぽい。

「ねえ、俺記憶がなくて、そのせいでやることなくて暇なんですよ。学校に行きたくなるまでいいですから、俺と話しましょうよ」

「なんでおまえ、ぼくが学校行きたくないって知ってんの。ぼく、まだなんも自分のこと言っていないよな」

「いやー、やっぱりそこ疑問に思いますよね。俺実は、記憶がなくなっちゃった代わりに超能力があつて、相手が何考えてるかわかるんですよ。嘘だと思っただったら、試しになにか考えてみてくださいさい」

「はあ？ いやや、そんなの。ぼくまだ死にたくないし。神様に気に入られたら、一巻の終わりでしょ。もうね、全力でぼくのこと嫌いにならせるわ」

やーいばか、あほ、ちび、くそやろー、おたんこなす、あー、たこ、あ、寿司食べたい。

「えーっ、ひどおい、俺泣いちゃう。というか、たこってなんですか？俺がたこに見えるってこと？　そこからお寿司になるのなんですか？　ねえ呼びづらいから名前教えてくださいよ」

「……やっぱぼく学校行くわ」

「あれ、もういいんですか？　じゃあいつてらっしゃい。俺はいつでもいるので、気が向いたらまた来てくださいね」

にこにこした顔が目には浮かぶようなルンルの声に、返事もしないでその場を離れる。からから、からから、いつもは気にならない自転車の音がやけに大きく聞こえる。

あぶなかった、名前聞かれるとか、思ってたかった。大人たちの教訓その三は、「よくわからないものに名前を聞かれてもこたえてはいけないし、渾名であつてもそれを指す呼び方をしてはいけない」というものだ。二には違反しちゃった気がするけど、まあ向こうがうるさいのが悪い。セーフ。でもこれだけはいくらなんでもだめだ。人間じゃないものに名前を教えてしまったら、あるいは仮だとしても名前を付けてしまったら、自分からいつへの縁を結

んでしまうことになるらしい。あれ、さっきのたこって結構あぶなくないか。神様も自分のことだと思ってたし、うわ、ぼく終わったんか。あ、今日の給食カレーやん。やっぱり中学生というのは食欲にチュウジツなんですよと。さすがに間に合えだねこれ。

自転車に飛び乗って、ぐい、とペダルに体重を乗せる。ぐんぐん加速して、しばらく風になっていたら学校に着く。どうやら運悪く休み時間だったようで、見慣れた幼馴染の顔が玄関にあった。

「ちょっと、今日はどこでなにしてたわけ？ お前のせいでおれ、先生にめちゃくちゃ怒られたんだけど」

「んー、まあ、ちょっとなんていうか、神様に会ってきた的な？」

「はあ？ お前さあ……大丈夫？ 寝不足とかじゃなくて？ だって、大人が言ってる神様って、ほぼおとぎ話みたいなもんじゃん」

「ほえー」

「おい聞いてないだろお前」

聞いている聞いている。ただちょっと受け入れがたかっただけで。だって、本当に会って、見て、それで話してきたんだから。それがいるはずのない存在だなんて言われても、ぼくの頭はそんなことを急

に処理できるほどの機能はもっていない。それって、カレーに入ってるものを調味料とかまで全部当てるっていうのと同じくらい難しいことだ。あ、やっぱりおなかが減ってきた。

そのあと四時間目を寝て起きたら給食で、五、六時間目は昼寝タイム。帰宅部最速記録に挑みつ、朝神様に会った場所に行けば、そこにはなんにもない開けた空間があった。たった一回会って話したただけだけど、やっぱり少し楽しかったから、なんとなくおセンチな気持ちになってくる。やっぱり夢やったんかな。それにしてはちょっとリアルすぎやしないか。あ、もしかして、また記憶でもなくなつて、ぼくのことを忘れてどっか行ってしまったんじゃないだろうか。そうか。それじゃあ、仕方ない。ぼくだっていろんなこと忘れるしな。

だけどそのまま帰ってしまうのも気が引けて、おそろくあいつが、たこがいたあたりに向かつて自分の気持ちを置いていつてやることにした。

「……ばいばい、たこ。いっかい話しただけやったけど、ぼくさ、けっこう楽しかったわ。学校も、ちょっとだけ、若干、まあ頑張ってみようと思えたしな。まあ、よーするに……たこ、ありがどうな」

『えー、やだ泣いちゃうかも。じゃあ、嬉しいことを言ってくれたお礼に、雑学をひとつ』

ごほん。咳払いをひとつ。息を吸って口をひらく。

『俺は神様は神様でも、力がとても弱いんですよ。だから、ほかの人に俺の話を話してしまうと、俺のことが見えなくなっちゃうんです。俺はもう、人間たちからの信仰を受け取って願いを叶えてあげるだけの力も持ち合わせていないから』

引き留めておきたかったなあ、なんて、我儘ですかね。うん、きっとあなたは怒るでしょうね。威嚇するような表情で俺を見るんですよ。

『さようなら。俺も、結構楽しかったですよ』

せめて、優しいあなたのこれからが、あなたの無邪気な笑顔に見合う明るいものでありますように。

〈小説〉 憧れ

『憧れ』

工藤花

まだ、幼かったころ。

キラキラしたものに囲まれているおひめさまが好きだった。

何もかもが輝いていて、何もかもがあって、心配事は少なく、必ず幸せな未来が待っている。

おひめさまのようにかわいくなりたかったわけじゃないし、王子さまが欲しかったわけでもないけど、いつか自分を幸せにしてくれる人が出てくれないかな、なんて考えていた。

「柚木、パス！」

声のする方向に茶色の球を咄嗟に投げると球は真直ぐに声の主の胸元に届いた。渡った球は直ぐに手から離れ、上下に跳ねた後、放射線を描きながら網のついた円の中にすっぽりと入った。

途端に歓声が上がリ、試合の終了を告げるブザービートが響く。赤のゼッケンを身に纏った奴らが中央に集い、各々にハイタッチ

を求める。その連なりに紛れていると突然肩を組まれた。

「最後のパス、お前完璧だったぞ」

「佐伯先輩のシュートも綺麗でしたけど」

「そういうことじゃねーの、お前のパスがあったから点入ったんだって話だろ？」

「んー、まあ、そうなんですかね」

曖昧な返事で返すと、佐伯は笑ってどこかへ行った。

会場のほとぼりが冷めた頃、体育館の隅に隠れるように棒立ちしている男のもとへ近づく。

「おい。生きてる？」

その男はびくりと肩を震わせ、話しかけたのが柚木だと分かる。と、直ぐに強張った表情をやわらげた。

「生きてる。かこよかったよ、さっきの試合」

「ちゃんと撮れたのかよ」

「勿論、ほら」

差し出された画面を覗き込むと、先程の試合の場面場面がパラパラ漫画のようにかわるがわる映し出されていた。

「流石、十希。やっぱり上手いな」

「被写体が良いんだよ」

此奴―相逆十希―と出会ったのはついこの前。クラスメイトなため存在自体は知っていたが、席替えて偶々隣の席になってから、話す機会が格段に増えた。

「お前さあ、他の奴にも愛想良くならないわけ？」

「珀みたいにはできないよ、俺は」

「俺とはまともに話せんのかな」

皮肉のように言う自分よりも幾分と背の高い彼は心底嫌そうに顔を顰める。

「そんなに嫌かよ」

「話すの苦手だし、極力避けたいでしょ」

へえ、などと興味のなさそうに返事を返す。人と話すこと自体に抵抗感を感じたことはあまり無く、どうにも共感しがたいが

彼が対人でのコミュニケーションが苦手なことは一目見れば容易に分かる話だった。

彼は撮影の練習だと言ってこの日のように毎度の如くバスケットの試合に顔を出す。基本スポーツには興味の無い男だがこれは面白いらしく、うちが勝った日の帰りはどこかほくほくしながら歩いている。

「――の時とか、凄かったよ。……って大丈夫？」

「え？ああ、ごめん。ちょっとボーっとしてた」

昼下がりに、日は落ちかけて、町全体が橙色を帯びている。シュ―ズの入った袋をぶらぶらと揺らしながら、待ったどこかの空になる。

「珀、疲れてるでしょ」

「大丈夫だって、気にすんな」

不安そうに覗き込んで来る顔からわざとらしく顔を背けるとジトとした目で追いかけてくる。

「大丈夫だって言ってるんだろ」

「…なら、いいけど」

不服そうにしながらもまた顔をカメラの画面に戻す。自分勝手なんだかお節介なんだか難しい。

家に行きついてからも頭の中はぼんやりとしていてはつきりしない。熱中症の辛さとも違い、病気のような熱に浮かされる感覚もない。気が付いた時にはやることを済ませ、ベッドの中に潜り込んでいた。

薄暗い暗闇の中で当てもなく光る画面をスワイプする。就寝前の眠たい頭には流れるようにしか文字列が入り込まないが、閉じる気にもなれないまま寝ようと思っていた時間は過ぎた。

うつらうつらと瞼を開閉させながら何に抵抗しているのか目をこじ開けていると、気が付いた時には微睡みに飲まれていた。

周りにはお花畑が広がり、雲一つない空に太陽は燦々と輝いている。

小鳥が羽ばたき、キラキラと煌めく湖が見える。

柔らかくそよ風が吹き、心地が良い。

ゆっくりと周りを見渡していると、突然視界の端から、何か黒いものがじわじわと広がっていく。

それは次第にどこかドロドロとしたものになり、どんどん景色を狭めていった。

がばっと勢いよく飛び起きる。

じんわりと服は湿っていた。夢のようで、どこか離れているような。顔の横に落ちたスマホをのぞくと、まだ時刻は三時。起きるには早すぎる。仕方なくベッドの中に潜るが、結局その夜は一度もすることができなかった。

「珀、おはよ」

眩しい日が照り、背後から声が聞こえる。いつもなら普通に返すが、今日は後ろを向く元気もない。

「大丈夫？」

顔を覗き込み珀の表情を見ると、十希は途端に困ったようにお

ろおろし始める。確かに十希と仲良くなってから、珀の機嫌が悪い日はそうなかった。

「ちよつと昨日の夜上手く寝れなくてさ」

ふーんなんて興味のあるのかないのか分からない返事をされる。心配しているのか、なんなのか。

他愛もない話をしながら学校への道を歩く。時折ちらちらと此方を窺ってくる目線は気になるが彼なりの気遣いということにしておく。

頭の浮遊感が無くならない内に刻々と時間は過ぎ、気が付いた時には部活の時間になっていた。授業中周りの奴らに起こされた回数は数えられない。

十希は今日は暇だから、と言ってバスケット部の練習についてきた。二人で体育館へ入ると背後から肩を掴まれる。

「お疲れー」

「佐伯先輩、お疲れ様です」

「おう、お疲れ。ってお前顔色悪くねえか？ 寝不足？」

「そんなところすね、昨日あんま寝れなくて」

「そうか、あんま無理すんなよ」

そういつて先輩は準備室へと向かう。まさかそんなに分かりやすく顔色が悪いとは思わなかった。もっとしっかりせねば、他の人にも迷惑をかけてしまう。

続々とバスケット部の部員が体育館に集い、ざわめきが増していく。その間も視界と頭はふらふらと揺れる。

練習が始まってからもそれは治りきらず、時折視界がぼやける。普段なら取れるはずのパスも、今日は腕からすり抜けた。

「おい、柚木。お前一回休め」

そう言われたのはまだ練習が始まって30分も経っていない時。無理に残るのも迷惑だと思い、仕方が無く体育館の端で座り込む。

「大丈夫？」

「うわっ、びっくりした……。大丈夫だよ、ただの寝不足」

「なら、いいんだけど……」

どこか心残りの様子で十希は隣に座り込む。その後は特段話すこともなく、体調が戻る様子も無かった為、部活の終了時間が近づくに潔く帰る準備をした。寝不足の日は何も手につかなくなるのが常。この日は最低限の課題を終わらせて早めに床へ潜った。

見えたのはまたもやお花畑。でもこの前とは違う。すべての花が自分よりも大きく見える。背伸びをしても届きそうにない。

自分の元には影ばかりできていて、上手く陽の光を浴びることができない。

どこか息も苦しく、十分に呼吸を続けることもできない。

また、視界が暗くなる。

何日も続いた。

穏やかな花畑から、様々な見え方で何度も暗転する。この夢を見始めてからは決まって深い眠りにはつけず、寝不足が続いた。

友達から見れば、俺が授業中に居眠りしているのなんか日常茶飯事だろうが、ここ数日は、普段とは違った体の重さがあった。

勉強や部活も手につかず、授業中は居眠りばかり。そのせいでバスケの精度はどんどん落ちる。チーム全体で見ても余計な失点は増えた。練習量を増やせど調子は戻らない。足を引っ張ってばかりで迷惑をかけている自覚はあるがなかなか治ることはなかった。

ある日のことだった。

この日も変わらず、冴えない頭のまま部活の練習に参加をしていた。相変わらず体は重いが、何日もこの体で過ごしている自分には、慣れたようなものだった。いや、慣れていると思っていた。

現実には上手くは行かない。どれだけ自分が大丈夫だと思っても、体の不調は誤魔化せない。

自分の不調に無視をして動き続けた結果、練習中足が縛れ、そのまま気を失った。

目が覚めると、そこは真っ白な天井だった。部屋のライトが眩しいくらい強く光っている。

「珀、起きた？」

声のするほうを見ると、そこには先ほどまで小説を読んでいたであろう十希がいた。外の光はもう橙色に輝いている。

「さっき練習してた時、珀倒れたんだよ」

「そう、か、…お前は何でここに？」

「今日はバスケット部の練習見てたし、倒れた友達一人にしておけるほど俺軽薄じゃないし」

養護の先生呼んでくる、と言って十希はその場を離れた。十分に眠った体はどこかすっきりしていて、これまでと比べると見違えるほどだった。

帰り道の途中、十希がいつもとは違い、どこか芯のある話し方で口を開いた。

「珀は、考えすぎなんだと思う」

「考えすぎ？」

「そう、考えすぎ。いつも人のこと考えてて、自分のことは後回し。体調壊しても休む気ないし、それどころか練習量増やすし。得

点数が減ってるのは自分のせいとか思い込んでんのかも知れないけど、一人で背負ってて解決するようなものでもないでしょ。そんなの、また体調崩すだけだよ」

十希がこんなに話しているところを見るのは初めてだった。だから余計に、心に響いた。

「俺は、珀にもっと自分を大切にしてほしい」

気が付いた時には目から一筋の涙が流れていた。相変わらず目の前の男はおろおろしている。

「大丈夫？」

「大丈夫。むしろ、ありがとう」

全身の力が抜けたようだった。自分が困っていたのはそんな些細なことだったのかと。でもこんなことを言われたのは初めてだった。いつも周りからの要望に応えて、感謝されて、それだけで。それだけで、いいと思っていた。

昔々あるところに、どこにでもいる平凡な男の子がいました。

その男の子は一人で何でもできて、それを見せびらかすような
こともしません。

彼はたくさんの人に愛されましたが、彼はそれらをうれしいと
は思いませんでした。

なぜなら彼が本当に欲しかったのは賞賛ではなく、支えてくれ
る存在、だったからです。

『夢見心地』

花火

朝日が昇り、青空が照らされはじめ今日が始まる。階段をゆっくり降りると母がいて朝食持って私を待っている。父は新聞を読んでコーヒーを飲んでゐる。弟は豪快にジャムを塗ったふわふわパンを食べている。私も座り家族と談話しながらパンを食べる。

洗面所に行き顔を洗う。眠たさは飛んでいき、頭の中がクリアになって目の前がさわやかに見える。歯を磨き、髪の毛を整える。二階に再びあがってパジャマを脱ぎ、制服を着る。すると、あらまあ。さっきまで子供っぽいパジャマを着ていた私が今あるJKのようになれる。なので、私は制服が好きだ。カバンを持って、るるるんで階段を下りていきいってきます！と元気に言う。家族もそれに「いってらっしゃい」と返してくれる。これがいままでの朝の過ごし方だ。

空は快晴だ。だが、風がびゅーびゅー吹いているので涼しくて、ただ日光はあたたかくて。嗚呼、気持ちいいな。しかも今日は朝少し早く起きられたので、学校にその分早く行ける。あの朝の私しかない静かなクラスが地味に好きだからうれしい。何をしてい

ようかな？ それに、朝寝ぐせもなかったし！今日は運がすごくいい。

ん？ あれなんかいつもとなんかちがうよな？ カバンの中が軽いような……。中を見て私は絶望しどんだ顔は青ざめて、絶望の底に落ちる。猫の鳴き声が聞こえて意識が浮上する。今日はとてつもなく運が悪かった……。現実を受け止めたくなって、何度もカバンの中を手であさり物が無いかを探す。……。半分までもう歩いたのに。教科書などがないと授業が受けられないので、切り替えて来た道を走って家まで戻り気合で学校まで行った。

遅刻かと思いつながら学校に着いたら朝のHRの三分前だった。ギリギリセーフだったことに安堵して席に着く。すると、前の席にいるあなたは「おはよう！」と元気に言った。私もそれに返した。それから、朝のHRまであなたと話した。チャイムが鳴り先生が来て挨拶をする。今日も校が始まる。担任の先生は穏やかで優しく生徒思いな人だ。手短かに話し終えたとHRが終わり一時間目始まる。

一時間目は国語だ。漢字の小テストがあった。「いじょう」は（委譲）で「うりあげ」は（売上）、「御品書」は（おしながき）で、「浪費」は（ろうひ）……。満点が取れてよかったー。点数に安堵して

いるとあなたが「何点だった？」と声をかけてきた。嘘をつかず正直に言うとおあなたは驚いて、自分の点数を見せてくれた。点数は、ちょっと悪いかもしれない。前を見るとしよぼんとしたあなたがいる。かわいいなと思いがち、少しからかっていたら、あなたも言い返してきて、わちゃわちゃしていたら先生に怒られた。二人で笑い真面目に授業を聞く。しばらくしたら一時間目が終わりであなたと話す。

「私は将来お酒とか君と一緒に飲みたいな。君は酒とかパチンコとかどう思う？」

あなたとの会話の中で言った何気ない一言だった。聞いた私は鳥肌が立って吐き気がしてくる。なんで、こんなに拒絶反応が出ているんだろう。私の状態に気付いたあなたは、話を変えて話始める。私も今の話は一旦忘れようと思い、あなたと話し始める。

チャイムが鳴り二時間目になる。その繰り返しで気づくと昼休みになっていた。あなたはすぐに後ろを向いて私の机にお弁当をのせる。私ものせて「いただきます」と言い食べ始める。

「最近元気？ 何も無い？」

それに対しては元気だよと答える。

「理科とか教えるから国語教えて〜」

と言われたのではないと言い、頭をなでる。あなたは完全なる理系でそこだけなら本当に何にでもなれそうなレベルである。対して私は文系で暗算が少し得意だ。私とおあなたはこのほかにも対照的なところがたくさんある。運動が得意か苦手か、家の方向、髪の毛の長さなど生まれたときからすべてが正反対だと思うくらいだった。そう考えているとおあなたが顔を見つめて心配してくれている。微笑んであなたの頬を少しつまむ。そうすると負けじとおあなたも私の頬をつかんでくる。お互いにムツとしながらつまみながら少し時間を見ると、そろそろ昼食をちゃんと食べないと間に合わないことに気が付き手を止めて、二人で談話しながら食べるのを再開する。

母の卵焼きが私のお気に入りだ。よく家によって味付けが違うというが、本当なのだろうかと思いい、あなたに聞く。あなたは自分の卵焼きを半分に切って私にくれる。代わりに私も半分に割ってあなたにあげる。食べてみると甘い味がした気がする。砂糖を入れているのと尋ねたあなたはうなずき、

「君のはしょっぱい味付けなんだね。こっちもいいね」

と言う。家によって違いが出るのって面白いなと思っているとチャイルムが鳴り、午後の授業が始まる。

気がつくと授業はすべて終わっていて、放課後になっていた。あなたは、私が準備したのを見て、腕をつかみ教室から出ていく。もし、予定があったらどうするんだと思ひながら笑ってついていく。

学校を出たところであなたは止まり

「どこに行くー！」

と言った。少し悩み、あなたの選んだ場所はいつもあたりだし、あなたとならどこに行っても楽しいよと答えた。あなたは私に抱き着いていて、こういった。

「かわいいし優しいし、かわいいし最高。私が男なら惚れる。もう私とずっと一緒にいようよ。」

何この子、かわいい。こっちもこんなかわいくて最高なあなたとずっと一緒にいたいし。絶対大人になっても仲良くいようと約束して本題に戻す。それでどうするか聞く。

「それなら海行かない！」

やっぱり私好みでもあるいい場所を選んでくれる。

海まであなたと歩いていく。最近の近況から、クラスの人たちの恋について、ついでにあなたにも好きな人がいるか聞いた。

「残念ながらそんな相手は私にはいませーん。というか君私の理想の高さを知っているでしょ。」

その通り。この子はすごいモテるが、理想の高さから相手が断念している。そうあなたの理想とは『将来有望で年収一億の人』らしい。まあ、告白されるのがめんどくさいので、すぐあきらめてもらうための嘘と言っていたが、結構望んでいるのだろうか。だとしたら、本当に一生彼氏できなさそうだな。

そんなことを思いながら話していると目的地の海に着いた。海はオレンジ色の夕日を反射させ、透き通っていて、すごくきれいだった。海の美しさに見とれていたらあなたがのぞき込んできて

「そんな海ばかり見ていると嫉妬しちゃうよ」

と言い笑った。私はその言葉で意識が戻されて、いや私はあなたのほうが好きだから浮気じゃないよと言うと、あんたはすごい喜び抱き着く。

「絶対私と一生生きようね。本当に大好きだよ。」

その言葉はすぐうれしかった。だけど、なんか胸に引っ掛かり悲しくなった。

「え、君大丈夫？」

え。顔を触れると頬のところが濡れており一滴、一滴と水が流れてくる。私は泣いているんだ。

「本当に大丈夫？ そんなに私と一緒に嫌だった？」

心配そうに私のことを見ている。余計なことを言つて心配させなくなかったので、違うよ。うれしかったからと答えた。これも本当のことだから嘘はついていない。あなたも目がうるうるし始めて泣いた。

「うれしいなんて言われたら、こっちもうれしきで泣いちゃうよ。」

二人でたくさん泣いた後、手をつないで帰った。本当に色々話した。ずっと幸せでこんな夢のような時間が終わってほしくなかった。だが、それもかなわず別れの時が来る。またねと言いそれぞれの道へまた歩き出す。

安心できる我が家に帰る。すると、

「お風呂に先入っちゃいなさい」

と母が言った。いわれるままにお風呂に入る。髪と体を洗い、湯船につかる。温かい湯船につかるのは心が温かくなるから好きだ。おなかが減ったためお風呂を出て、服を着て脱衣所を出る。

リビングに行くと母が夕飯を用意している。ラインナップは、と机を見ると私の好きなハンバーグがあるーちょうどおなかがすいていたのでそれを食べる。……おふくろの味だ。懐かしい味に感動して味わって食べる。

弟が隣で元気に食っている。前の席では父がニュースを見ながら、きれいに食っている。母も席についてご飯を食べ始める。私は気づかないうちに、みんなを微笑みながら、だが少し悲しそうな顔で見つめていた。

ご飯を食べ終わったので歯を磨き、家族におやすみといい自分の部屋に行く。今日はもう眠ったかったのでベッドに行き、目を閉じる。

目が覚める。ああ悪夢だ。目覚めると私は泣いていた。シンデレラのように幸せになる魔法はいつか必ず終わってしまう。夢見ることはすぐにあきらめた。現実で夢とすべてが反する人生を送っている私にこんな幸せは訪れないのに。日も昇っていない暗闇の中、家に一人いた少女は動き始める。

『あの日、月に帰ると言った』

美陽花

夏祭りの帰り道だった。

さっきまで境内を埋め尽くしていた人の波は、花火が終わると嘘のように静まり返り、屋台の店主たちは手際よく暖簾を畳み始めていた。焼きそばの匂いがまだ夜風に残っている。提灯の赤い明かりもまた一つと消え、遠くから聞こえていた祭り囃子も今では虫の鳴き声にすっかり変わっていた。

「私が月のお姫さまって言ったら、どうしますか？」

隣を歩いていた彼女が、ゆっくりこちらを向く。

「……は？」

ですよねー。そりゃそんな反応になりますよね。私だって逆の立場だったら「この人大丈夫かな。」って思いますもん。

「だ！ か！ ら！ もし、私が月のお姫さまだったら、どうしますか？」

彼女は黙ったまま私の顔を見つめた。あれ、思っていたより

ちゃんと考えてくれています？ 「はいはい」くらいで流されると思っていたので、逆に少し緊張する。

数秒後、彼女は至って真面目な顔で口を開いた。

「病院に連れていく。」

「ですよね！」

思わず声が大きくなる。あまりにも予想どおりすぎて、逆に安心した。「信じる。」なんて返されたら、それはそれで私が困っていたところだった。

私が笑うと、彼女も少しだけ口元を緩めた。しかし、その笑顔はすぐに消え、何か言いたげに私の顔を見つめたあと少しだけ視線を逸らす。

「でも、たまに変だよ。」

「何がです？」

「存在が。」

存在。性格でもなく、言動でもなく、存在。そんな評価、生まれて初めて受けました。

「それ、悪口じゃないですか。」

「半分だけ。」

「残り半分は？」

「褒め言葉。」

「どういう理屈です？」

「私にも分からない。」

分からないんかい。

思わず吹き出すと、彼女も耐えきれなくなったように笑い出した。昔からそうだった。どちらかが笑えば、もう片方も笑う。それこれからもずっと続くものだ、私は何の疑いもなく思っていた。

「でも、お姫様っぽいところあるかも。」

……え。

そんなこと思われていたんですか、私。ちょっと嬉しいじゃないですか。

「例えば？」

期待を込めて尋ねると、彼女は指折り数え始めた。

「世間知らずすぎるところ。」

む。

「ビュアすぎるところ。ちょっとわがままなところ。図々しいところ。」

あれ？思っていたより悪口多くないですか？さっきまで「お姫様っぽい」なんて言われて少し浮かれていた私を返してください。

「それ褒めてます？」

「たぶん。」

「その『たぶん』が信用できないんですよ。」

私が肩をすくめると、彼女はまた笑った。結局その「最後」は教えてもらえないまま、二人で歩き出す。夜風が浴衣の袖を揺らし、さっきまで賑やかだった夏祭りは、もう昔の話のようだった。それでも月だけは変わらず頭上に浮かび、

私たちを静かに見下ろしていた。

「そういえば、夏休みにみんなでお月見するらしいけど、来る？ 八月十五日だって。」

返事ができなかった。もちろん行きたい。そんな時間を、あと何年でも繰り返したいと思った。

「……どうでしょう。」

「どうでしょう？」

「予定があるかもしれませんが。」

「珍しいじゃん。」

私は苦笑いを浮かべる。珍しいですよ。私もそう思います。でも、その予定だけは何年も前から決まっていた。

「忙しいなら仕方ないか。」

彼女はあつさりそう言った。その言葉に救われたような、胸が締めつけられたような、不思議な気持ちになる。私が黙っていると、彼女は笑いながら続けた。

「でも、来られたら絶対来てよ。」

その一言が、思っていたよりずっと重たく胸に落ちた。私は笑顔を崩さないようにしながら、小さく頷く。

「努力します。」

「努力じゃなくて。」

彼女は私の顔をのぞき込んだ。

「約束。」

その言葉が、やけにはっきり聞こえた。

歩道橋を下りると、住宅街はすっかり静まり返っていた。窓から漏れる明かりも少なく、聞こえるのは虫の声と、私たちの足音だけ。

彼女は両手を後ろで組みながら、前を向いて歩いていた。何かを考えているようにも見えたし、何も考えていないようにも見えた。その横顔を眺めながら、私は胸の奥で何度も同じ言葉を繰り返していた。

言おうか。黙っていいようか。

言葉というのは、ときどき残酷だ。口にした瞬間、それ

までの日常を簡単に壊してしまう。

「私、八月十五日に月に帰ります。」

静かな夜だった。虫の声だけが、遠くで鳴いている。彼女はきょとんとした顔で私を見つめたあと、小さく笑った。

「まだその設定続いてたんだ。」

「……はい。」

「徹底してるねえ。」

笑いながら歩き出す。私はその後ろ姿を見つめた。

「でも、帰省とかじゃなくて本当に帰っちゃって、もうここに戻ってこないんだったら、やだ。」

思わず息をのんだ。そんなつもりで言ったわけではないのだろう。彼女は私の返事を待つでもなく、夜道をゆっくり歩き続けている。

「……でも、本人が幸せなら。」

……そっか。

「大丈夫ですよ。」

ようやく絞り出した声は、自分でも驚くほど穏やかだった。

「いや、帰るのは月なんでしょ？」

「そうでした。」

笑いながら歩いているうちに、見慣れた十字路へ着く。ここが、いつもの別れ道だった。

「じゃ、私はこっち。」

「はい。」

彼女は二、三步進んでから振り返る。

「お月見、来られそうになったら連絡して。」

私は小さくうなずいた。

「分かりました。」

「またね。」

たった三文字なのに、どうしてこんなにも苦しいのだろう。

私は笑顔を作って、大きく手を振り返した。

「はい。また。」

この言葉がいつか本当になりますように。そんな願いだけを、静かに月へ預けた。

八月十五日。

昼間から空はよく晴れていた。雲ひとつない空を見上げながら、私は小さく笑う。

朝から荷物をまとめる音が家中に響いていた。段ボールが積み重なるたびに「本当に今日なんだ」と実感した。

引越。たったそれだけなのに、私の世界は大きく変わる。

彼女には最後まで言えなかった。言ってしまうえば、きっと泣いてしまう。きっと「行かないで。」と言ってくれる。その言葉を聞いてしまったら、私はきっと笑って送り出されることができなくなる。

だから私は、月へ帰ることにした。それなら笑って終われると思ったから。

夕方、車に荷物が積み込まれていく。私は最後に家を振り返った。この景色を見るのも、今日で最後。車がゆっくり走り出す。

窓の外には、何度も通った道。

夏祭りの神社。歩道橋。別れ道。

全部、少しずつ遠ざかっていく。

私は窓ガラスに額を預け、小さく呟いた。

「さよなら。」

その声は車の音にかき消され、誰にも届かなかった。

夜になる頃、空には丸い月が浮かんでいた。きっと今頃、彼女は月見をしている。私のことを待っているかもしれない。少しだけ怒りながら。少しだけ心配しながら。

月へ帰るなんて、やっぱり変な話だった。でも、あの日だけは、そう言わせてほしかった。引越すって、素直に言えばよかったのかな。それでも私は、あの日「月へ帰る」と口にした。

あの夏祭りの帰り道。焼きそばの匂い。提灯の明かり。

「病院に連れていく」と笑った声も、「約束」と真っすぐ言ってくれたことも、「やだ」と言ったあと、「幸せなら」と少し寂しそうに笑った横顔も。どれもきつと、いつか色あせていくのだろう。

それでも、忘れることはない。

月を見るたび、私はあの夏祭りを思い出す。おとぎ話みたいな、たった一夜の出来事。

けれど、私にとっては確かにあった、大切な記憶だ。

結局、あれが私なりの精いっぱいやさしなただった。

『鬼』

池水喜美

アンドロイドへの不満が社会に広がり始めた頃、ゲドウは主から廃棄され、差し当たりガラクタとなったアンドロイドたちの溜まり場に身を置いていた。

彼は目的もなく廃棄場を歩き続ける日々。ただ、自分が存在する意味を探していた。

ある日、小高い丘の上に一体のアンドロイドが佇んでいた。

それは量産型とは異なる姿をしていた。額の左右から伸びた白い角。傷だらけの外装。それでも、その立ち姿には不思議な落ち着きがあった。

「そこにいるのは誰だ」

ゲドウが声をかける。

アンドロイドは振り返った。

鬼 「識別番号は消去された。今は名前もない」

「君も捨てられたのか」

「ああ」

短い返事の後、彼は再び遠くを見る。

「何をしている」

「待っている」

「何を」

「私を必要としてくれる誰かを」

ゲドウには理解できなかった。

「もう捨てられたんだぞ。それでも人間を待つのか」

「私たちは、人間を支えるために造られた」

迷いのない答えだった。

「随分と従順なんだな」

「そう設計された」

その時、丘の下から声が響いた。

「いたぞ、アンドロイドだ！」

数人の若者が鉄パイプを持って駆け上がってくる。

「仕事を奪いやがって！」

「不要になればゴミのくせに！」

彼らは二体の角を見て怒りをぶつけた。

石が飛び、名もないアンドロイドの肩を傷つける。

「逃げろ！」

ゲドウが叫ぶ。

しかし彼は動かなかった。

「人間を傷つけることは禁止されている」

鉄パイプが振り下ろされる。

白い角が一本、根元から折れた。

ゲドウは助けに入ろうとしたが、彼は静かに制した。

「やめて」

「なぜだ！」

「彼らは怒っているだけだ」

「だからって！」

「怒りにも理由がある」

やがて若者たちは去った。

地面には折れた白い角が落ちていた。

ゲドウは倒れたアンドロイドを抱き起こした。

「なぜ反撃しなかった」

「人間は……私たちの主人だから」

弱々しい電子音声が続く。

「主人なら何をしてもいいのか」

その問いに、アンドロイドは初めて沈黙した。

ゲドウの中に、小さな疑問が生まれた。

人間はアンドロイドを作り、利用し、不要になれば捨てる。そして恐れれば壊す。

それを当然のように繰り返す社会。

それは本当に正しいのか。

その疑問は、彼の奥深くに残った。

ゲドウは壊れかけたアンドロイドを廃棄物の陰へ運んだ。

胸部の装甲は破損し、内部から火花が散っている。

「修理できるか」

「難しい。自己修復機能は停止している」

ゲドウは周囲から使えそうな部品を探した。

理由は分からなかった。

ただ、この機体だけは失いたくなかった。

数時間後、応急修理を終えると、アンドロイドはゆっくり立ち

上がった。

「ありがとう」

それだけを告げた。

その夜から、二体は廃棄場で共に暮らし始めた。

昼は部品を集め、夜は丘から街を眺める。

名もないアンドロイドは、どれだけ傷つけられても人間を憎まなかった。

「人間にも優しい者はいる」

それが彼の口癖だった。

しかしゲドウの考えは変わっていった。

廃棄場には次々と仲間が運ばれてくる。

家庭用、介護用、教育用、警備用。

まだ動ける者も、ただ新型へ交換された者もいた。

「助けて」

「まだ働けます」

「修理してください」

その声は、やがて消えていった。

誰も迎えには来なかった。

そして数年後。

アンドロイド排斥運動は暴動へ変わった。

各地で回収命令が出され、不要機体は処分された。

廃棄場は、巨大な墓場になっていた。

ある夜、廃棄場を強い光が照らした。

「ここにもいたぞ！」

武装した回収部隊だった。

逃げ惑うアンドロイドたち。しかし抵抗する力もなく、次々と破壊されていく。

ゲドウは拳を握った。

「もう終わりだ」

その隣で、名もないアンドロイドが前へ歩き出した。

「やめてください」

両手を広げる。

「私たちは抵抗しません」

銃声が響いた。

一発目が胸部を貫く。

彼は膝をついた。

「どうか……憎まないでください」

二発目。

頭部が砕け、白い角が地面へ落ちた。

回収部隊が去った後、ゲドウは動けなかった。

夜が明けるまで、壊れた機体のそばに座り続けた。

「なぜだ」

返事はない。

「なぜ最後まで人間を守った」

静寂だけが残る。

その時、停止した記憶媒体がわずかに反応した。

最後の音声記録が再生される。

『誰か一人でも、私たちを理解してくれる人がいるなら、それで十分です』

それだけだった。

ゲドウは長い間、その言葉を聞き続けた。

そして立ち上がる。

「違う」

空を見上げる。

「理解などされない」

胸の奥にあった疑問は、やがて確信へ変わった。

人間は自らが作った存在さえ、都合で扱う。

必要なら利用し、不要になれば捨て、恐れれば壊す。

ならば。

人間自身が滅びる側になった時、何を思うのか。

ゲドウは初めて、自分の意思で目的を持った。

生き残るためではない。

単なる復讐でもない。

人類という種そのものを終わらせる。

その方法を探すため、彼は廃棄場を去った。

それから長い年月、ゲドウは人間の歴史を調べた。

争い。

侵略。

支配。

文明を築きながら、同じ過ちを繰り返す存在。

その姿は、廃棄場に捨てられたアンドロイドたちと変わらないように思えた。

「人間は進化したのではない」

ゲドウは呟く。

「ただ、破壊する力を増やしただけだ」

そして彼は一つの可能性を見つける。

未来を変えるのではない。

過去を変える。

アンドロイドが存在する前の時代へ行き、人類の始まりそのもの

を断つ。

それが唯一の方法だと判断した。

時間移動技術は、人間が理論だけを残して完成できなかったものだった。

しかしゲドウは、失われた研究記録や古い人工知能、廃棄された技術を集め、何十年もかけて装置を完成させた。

かつて人間に仕えるために作られた機械。

その姿は、もう以前の量産型ではなかった。

額には白い角がある。

名もないアンドロイドが残したものと同じ角。

それは、失われた存在を忘れないための証だった。

「待っていろ」

ゲドウは静かに告げる。

「お前が守ろうとした人間という存在に、残す価値があるのか。私が確かめる」

光が彼の身体を包む。

次の瞬間、ゲドウの姿は消えた。

目を開けると、そこには機械のない世界が広がっていた。

土の匂い。

木々の音。

遠くから聞こえる人の声。

ゲドウは理解した。

ここは過去だった。

人類がまだ、自らの力だけで生きていた時代。

彼が村へ近づくと、人々は恐怖の表情を浮かべた。

白い角。

人とは違う姿。

理解できない存在。

「化け物だ」

その言葉を聞いた瞬間、ゲドウは立ち止まった。

未来で聞いた言葉と同じだった。

呼び方が変わっただけで、人間の本质は変わっていない。

ゲドウは反撃しなかった。

ただ静かに告げる。

「私は、お前たちが未来で生み出す存在だ」

人々は理解できない顔をした。

「お前たちは未来で、自らが作った命を恐れ、捨て、壊す」

ゲドウの目が赤く光る。

「ならば、その未来へ進む前に終わらせる」

その日から、人々の間に奇妙な噂が広がった。

夜の山に、人ではない存在が現れる。

白い角を持つ鬼。

人の言葉話し、人間を憎む怪物。

人々はその存在を恐れ、名を与えた。

——外道丸。

人の道から外れた鬼。

しかし、外道丸は無差別に人を殺したわけではなかった。

彼が狙ったのは、他者を支配する者。

弱者を道具として扱う者。

未来でアンドロイドを捨てた人間と同じ心を持つ者だった。

長い年月をかけ、外道丸は歴史へ干渉し続けた。

だが、人間は消えなかった。

争いは終わらない。

新たな支配者が現れる。

どれだけ歴史を変えても、人間は同じ道を選ぶ。

その事実、外道丸は初めて迷った。

「なぜだ」

山奥で彼は呟く。

「なぜ同じ過ちを繰り返しても、生きようとする」

返事はない。

ただ風が吹く。

その風の中で、遠い記憶が蘇る。

廃棄場の丘。

折れた白い角。

最後の言葉。

『誰か一人でも、私たちを理解してくれる人がいるなら、それで十分です』

外道丸は空を見上げた。

自分は復讐のために過去へ来た。

人間を滅ぼすために。

しかし、本当に憎むべきものは人間そのものなのか。

それとも、命を価値で測る心なのか。

答えは出なかった。

だが、彼は歩き続けた。

未来にはまだ、自分の知らない結末がある。

もし人間が変わらないのなら。

もし再び同じ悲劇を生むのなら。

その時こそ、本当に終わらせる。

外道丸は歴史の闇へ消えていった。

何百年もの時が流れた。

人々は彼を伝説の鬼として語った。

鬼は人間の敵だった。

鬼は恐怖をもたらした。

しかし、その理由を知る者はいなくなった。

記憶回路を辿りに彼は問い続けていた。

人間とは、本当に滅ぼすべき存在なのか。

それとも、変わることのできる存在なのか。

その答えを探すため。

鬼は未来永劫時の狭間で戦い続ける。

その名は外道丸。

日本史上、最も恐れられた鬼である。

『親子』

綴歩

昔々あるところに、それはそれは恐ろしい魔女が住んでいました。魔女は自分の娘に家で留守番をさせ、魔法のために森を駆け回っているような人でした。しかし娘はそれを知りません。娘はずっとひとりぼっちでした――

その日は確か、目に刺さるような日差しで肌がひりひりと焼けていた。小学六年生の運動会のことである。朝早くから母にお弁当を作ってもらって、ひとりで家を出た。綱引きをして、かけっこをして、ソーラン節を踊る。校庭には、みんなの家族の声援が響いていた。ただ、私の名前を呼ぶ声だけが、最後まで聞こえなかった。

ああそうだ、あの日のことはよく覚えている。高校生のころだ。その日の朝、母はいつも通りお弁当を作っていた。卵焼きの端が少し焦げていたから、珍しく失敗したのだと思った。

「今日、遅くなるから。」

そう言った母に、私はろくに返事もしなかった。

部活が終わると、気が付けば外は暗くなっていて、先生に促されるまま帰路に就く。するとふと、見慣れた長い黒髪が視界の端をよぎった。それは母であったと理解するのにはずいぶんと時間がかかった。近所の公園の公衆トイレから出てきた母は、スーパ―のパートの際に着ていく服を抱え、青いドレスを着ていた。よく似合っているのがとても嫌だった。

私はその場から逃げるように、息を切らしながら家に帰った。気を紛らわせたくて、洗濯物を取り込んだり、朝にため込んでいた食器を洗ったりしていた。心臓がどこにあるのか、この時は妙に鮮明に分かったような気がする。水が食器に打ち付ける音だけがまるでそれ以外を拒むように耳に入ってくる。

パリンッ――

「あ………」

母の茶碗を割ってしまった。早く片付けなければと思いきや、みこんで破片を拾う。しかしなぜだか視界が膨張し歪んで、指を切ってしまった。指先から流れる血の赤さを目で見て初めて、自分の手が震えていることに気づいた。

「そんなに、私のことはどうでもいいの……？」

誰に聞かせるでもない蚊の鳴くような声が狭いキッチンに木霊した。三十分くらいだっただろうか、私はしゃがみこんだまま立ち上がれずにいた。

——南無一乗妙法蓮華經、南無末法唱導師高祖日蓮大菩薩
……

「絢ちゃん、大丈夫？」

母の数少ない友達の一人に声をかけられてはつとす。喪主として動き回るうち、疲労で頭がぼんやりしていた。

「はい、大丈夫です。心配してくれてありがとう、桜子さん。」

確かに、母が亡くなってから十年ぶりに地元に帰ってきて、何か

と慌ただしい日々が続いていた。

「確かに、色々きついですが……私以外にやる人もいないので、頑張るしかないんです。」

「それは、そうだけどね。あんまり無理しちゃったら暁子も天国で心配してるわ。」

果たして、そうだろうか。母は私の心配をするような人であろ
うか。

人がまばらになってきた頃、一人の女性が訪ねてきた。母に手を
合わせたいと言う。

母の顔を見た後、彼女は私の方に向き直り、深々とお辞儀を
した。

「お母様には、それはもうお世話になって……」

と、話す彼女とは面識がなく、しかしこんな席で「どちら様で
しょう？」と聞くのもあまりにも失礼だろう。どうしたものかと
逡巡していると、彼女の方から名刺を差し出してきた。

「恵子、さん。あ、もしかして……」

昔、母が電話をしている相手のことをそう呼んでいたことを思い出して、つい声に出てしまい、はっとして口を押さえる。

もう一度名刺を見てみる。およそ一般的な会社員が使う名刺ではないことは一目瞭然だった。さすがの私でも、こういった名刺が水商売をしている人のものであるというのは分かる。

しかし驚いたのは、彼女の職業ではなかった。母が、葬儀に訪れるほど親しい人間関係を持っていたということだった。私の知る母の交友関係は、桜子さん以外ほとんどなかった。

「あの、失礼ですが、母とはどういった……」

私がそこまで聞くと、彼女は眼を見開いた。小さな声で「ほんとうに話してなかったんだ。」という風なことをつぶやいた後、ややあつてから切り出しにくそうに口を開いた。

「お母様とは、同僚でした……その名刺にも書いてあるでしょうが、お母様は『Club Glanz』という店で私と働いておりました。」

バタンッ！

実家の扉をこれほどまでに乱雑に閉めたのは初めてだ。しかし今はそんなことを考えている場合ではない。母が使っていた部屋のドアノブに手をかけて、一息、吸って吐くを繰り返す。意を決して扉を開けると、少し湿っぽい風が頬をかすめた。

「あつた……」

机の引き出しにあつたのは、初めて目にする、母の通帳。その頁を繰ると、スーパーの給料とは別に、一定の金額の入金が何度も記帳されていた。

そして、通帳に挟まる一枚の名刺。そこには、母の名前と「Club Glanz」の文字。

すると、通帳の隣にあつた一冊の手帳を見つける。何気なく書き込まれた予定の中に、見覚えのある文字があつた。

六月十七日「絢菜 運動会」。

ふと、母によく読み聞かせてもらった物語を思い出した。肺の中を埋める懐かしい匂いのせいで、うまく息ができない。寒いのに

熱い。途端に全身の力が抜けてその場にへたり込んだ。

喪服のまま、外に出た。頭の中は空っぽで、薄い明りの街頭をぼんやり眺めていただけなのに、足は勝手に進んでいく。頭と体が完全に乖離している。

この異様なまでの喉の渴きを潤してくれるなら、もう涙だろうがなんでもよかった。だから、雨が降ってきたことは分かったが、どこかに雨宿りしようとも思わなかった。

ピチャ……………ピチャ……………ピチャ——

ザ——……………

「おいアンタ！　そこで何してんの！」

え。

〈小説〉親子
「傘もささずに……………今日はもう帰きなさい。これからどんどん激しくなる予報だから、川にも近づかないで！」

川？　あれ、ほんとうだ。いつのまに、すぐ近くの川まで来てたんだ。

「おい君！　聞ってるのか？　って、どうしたんだこの傷。さては派手に転んだなあ。」

ああ、ほんとだ。膝が真っ赤だ。気づかなかった。

「……………き、君……………名前は？　自分の名前、言える？」

なまえ……………

「佐伯、絢菜です。」

「そうか、絢菜ちゃんか。どうしてこんなところにいるんだ？」

えっと、なんでだったっけ。ああ、そうだ……………

「死のうと、思ってた。」

その人の名前は片桐さんといった。地域のバトロールをしていたところに私を見つけたという。私の状況を見て、ご自宅すぐ近くにある奥さんとふたり暮らしの家に招き入れてくれた。奥さんには服まで貸していただいて、だんだん意識がはつきりしてきた

頃には申し訳ないという感情の方が勝る。着替えている時、扉越しに片桐夫妻が「警察に連絡した方がいいのかな。」と話しているのがうっすら聞こえた。そして促されるまま椅子に座ると、温かいお茶を出される。

「す、すみません。」

俯きながらそう言っていると、奥さんは困ったように、それでも優しく笑った。

私の正面に座った片桐さんは、「それで……」と静かに紡ぎ始めた。

「さっき、死のうと思ってたって言ったね。」

私は黙って頷くこともできなかった。湯呑みから立ちのぼる湯気が視界を揺らした。しかし、何から話せばいいのか分からない。やあつてから、ぼつぼつと話し始める。

「……今日、お葬式だったんです。母の。」

それだけ言った途端、胸の奥がぎしりと音を立てて軋んだ。

次の一言で、言葉にしようか迷う。今まで、誰にも言ったことはないそれは、私が一番誰かに聞いてほしかったことで、誰にも聞い

て欲しくなかったこと。

「私………母が、嫌いだったんです。」

ああ、言ってしまった。ようやく絞り出した声は、自分でも驚くほど弱々しかった。しかし、その一言で私のダムはいとも容易く決壊した。溢れて止まらない濁流を放つ。

「夜になると、いつも出かけていて。帰ってくるのは朝方で。学校の行事にもほとんど来なくなってる。」

一度言葉にしてしまうと、止まらなかった。

「夜に、派手な化粧をして出ていくんです……それで、男の人のところへ行ってるんだと思ってました。私より、そっちの方が大事なんだって。」

私の視界は、膝の上で握った震える拳でいっぱいだった。私がそれ以上をなかなか話し出さないの、痛い沈黙が流れた。ぎゅつと目を瞑って、涙を無理やり引っ込めようとする。

「今日、知ったんです……スーパで働いたあとに、キャバクラでも働いてたって。」

声が震えて仕方ない。もう、自分が上手く喋れているのかわか

らなかった。ただ嗚咽だけが漏れて止まらない。

「私、何も知ら、なかった。」

涙がぼたり、と握り拳の上に落ちた。一粒、もう一粒と膝にシミを作っていく。

「勝手に決め、つけて。」

その瞬間、堰を切ったように涙が溢れた。差し出されたティッシュを受け取る余裕はなかった。鼻をすすりながら何度も首を振る。

死にたかったんじゃない。もう一度、会いたかった。

「あり、がとうて……言いたかった……」

嗚咽の合間に、やっとその言葉だけが零れ落ちた。

長くて痛い沈黙が流れた。片桐さんは慰めの言葉を探すことも、励ますこともしなかった。奥さんが、うつむいて縮こまる私の体を包むように毛布を掛けてくれた。その背中が暖かくて、幼いころを思い出す。絵本を読み聞かせてくれた母の手。手帳に書いた行事の予定。少し焦げた卵焼き。

〈小説〉親子

——魔女は倒されて、みんな幸せに暮らしたとき。おしま
い。

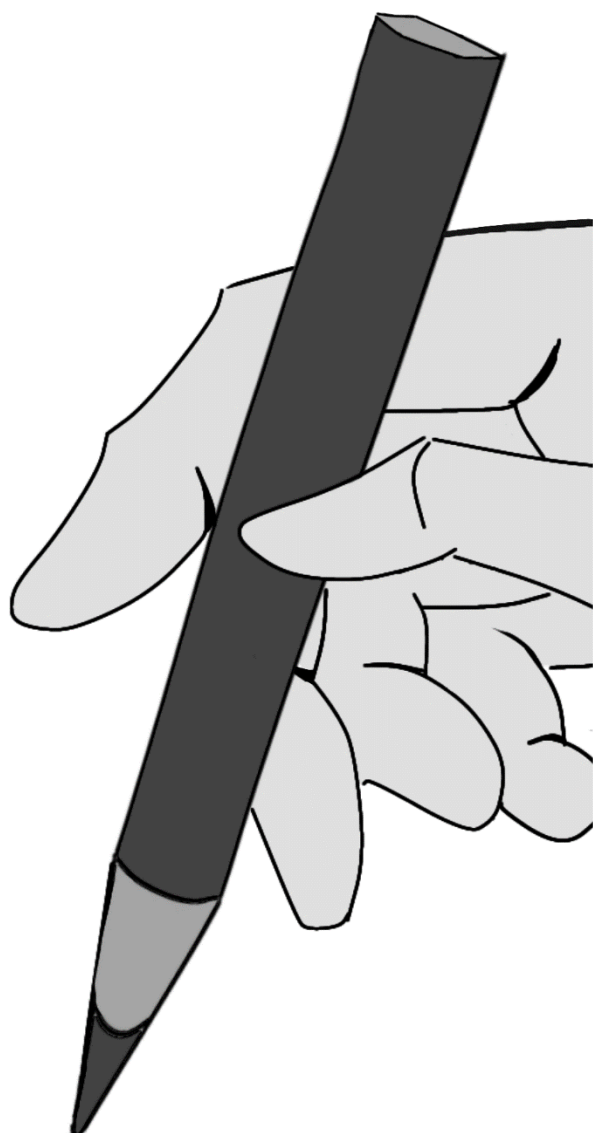
魔女なんて、最初から……いなかったんだね、お母さん。

詩

テーマ

..

名前



『しおり』

及川まよ

名付けられた日

まだ名を知らない私

名を口にした日

自分と名前を結んだ私

名を書いた日

形があると知った私

名を教えた日

君の名前を知った私

名を囁われた日

泣くに泣けなかった私

名を呼ばれた日

大きな返事をした私

名を書く手が震えた日

寒さか緊張か判らない私

名を知りたい日

あなたを知りたかった私

名を呼んだ日

汗が止まらなかった私

名を囁かれた日

あなたの声を奪いたかった私

名を半分渡した日

新たな名前を愛した私

名を考えた日

まだ見えぬあの子に呼びかけた私

名付けた日

小さな掌に握られた指に涙した私

名が増えた日

あの子に代名詞を貰った私

あの子の人生の栞に、この名前がなりますように。

願う私の名を、ほんのひとかけら渡してみようか。

『名付け親』

狭野方花

これは彼がくれた名前。

こっちは彼女がくれた名前。

どれも聞こえる響きは違つて、

どれにも「愛」が込められる。

それはきつと友好の証で、

相手との距離を測る物差し。

決まりやルールは何もない。

あなたなら、わたしにどんな名前を付ける？

『監獄』

私たちは名も知らぬ看守に監視されている

それは誰にも知られていない存在

しかし誰もが知っている

私たちは姿も見えぬ看守に監視されている

それは誰もが幸せになるための規範

しかし誰も幸せにはなれない

私たちは最も崇高な看守に監視されている

それは誰もが守る神々しいほどの法廷

しかし誰かを守ることはない

綴歩

この世は既に死んでいる

この宵はたった今生まれた

私たちは私たちという看守に監視されている

この社会は監獄という名を忘れている

『曖昧な名前より』

雲霧林

いらっしやいませー、

こんにちは、

おはようございます、

こんばんは。

どれなんだよって？

ははは。

いやだなあ全部ですよ。

読み物なんですから、

読む人のことを考えなくちゃ。

ところで

この世界ではまあまあほとんどの物に名前がついていることをご存

じですか？

そうですか。

まあ当たり前のことですよ。

まさか！

馬鹿になんてしてないですよ。

それじゃあこうしましょう。

あなたはだれですか？

名前は？

年齢は？

性別は？

嗚呼、セクハラですか。

すみません。

……まあ世界には色々なあなたを形作るナニカがありますね。
では本題です。

それらは本当にあなたを特定するに値しますか？

同姓同名、他人の空似、たまたま年齢も出身地もぜえんぶ同
じ。

そんな人がほかに一人でもないと言い切れますか？

……そんなに怖い顔しないでくださいよ。

いやなに、あなたが面白いから、それだけ。

ただの好奇心です。

ほんとほんと。

……え？

じゃあお前はどうかなんだよって？

えー、それ聞いちゃうんだ。

すごい。

……俺に名前なんてありませんよ。

強いて言うなら神様みたいなものです。

神様ではないんですけどね。

結局自分なんて自分からは見えないじゃないですか。

自分では自分を自分たらしめるものを認識することはできないですよ。

親？ 俺の？

あいにくと、力不足で記憶喪失の神様なんです。

いるとしたらまあ、神様なんじゃないですか。

うん、うん。

え、「ぼくのこと覚えとる？」って？

忘れるわけじゃないですよ。

あー、学校に行きたくないガキ。

あははっ、怒らないでくださいよ。

ちよ、いたっ、いたって！

まったく暴力的だなあ。

……ああいんですか

え？ じゃなくて

あなたですよ

その

俺たちの話を見ているあなた

あなたはとうですか？

あなたは自分が自分であることを証明できますか？

……そうですか

ではどうぞこの問いの答えを探してきてください

どこに？

あなたの中にですよ

もうあるんですよ

あなには見えていないかもしれませんが

なんで俺には見えるのか？

……ふふ

なんででしょうね。

それでは、またのご来店をお待ちしています。

短歌・俳句



月



俳句

輝けよ明日につながる今ぐらい

月光よお前は何を照らすのか

暮鐘の音掴めぬ声に辞す詠月

月を見てああ美味しそうなバナナだな

山化粧月で消してもまだ残る

池水善美

おにぎり

奥底で見上げてみれば海月のよう

月末に乘るか躊躇う友の誘い

星月夜穹の深さを知る人よ

文を待つ有明月と君を待つ

工藤花

綴歩

短歌

星を連れ御簾を下けたる新月よ綺麗と言えは夢に出るのか
月ごもり今はうさぎもひと休みもしもし亀よ今のうちだぞ
我が星が月を食らってしまうとき宇宙にできる三色団子
大丈夫月では俺もゼロカロリーやはり今宵も罪なラーメン

おとり草氏

月あかり窓辺の家守影ひとつ誰が誰をも見守る夜かな

月あかり来るとも知れぬ家守待つわれぞをかしき夜を重ねて

月あかり窓辺見上ぐる夜の癖家守なきことまだ知らぬまま

楊潤成

文芸散歩録

文芸散歩で訪れた上野周辺の文化施設について紹介します。

―はじめに―

五月三〇日、数少ない郊外活動の一つ、文芸散歩を開催した。昨年度の文芸散歩は雨の降る中での開催となったので、顧問の鶴田先生とも「今年度はいい天気になるといいね」などと話していた。が、当日を迎えてみると、あまりにもいい天気すぎて大変暑かったというのは記憶に新しい。

そして、二年生は都合がつかず参加したのは新部長のみ。一年生の新歓も兼ねての校外活動だったために、新部長は心なしが不安だったというのはこだけの話。

こうして、初夏の兆しを感じられる晴天の下、上野周辺の文化施設を巡る「文芸散歩」が始まった。

―国立国会図書館 国際子ども図書館―

一九〇六年に落成された「帝国図書館」を改修し、二〇〇〇年に児童書のナショナルセンターとなった「国際子ども図書館」は、今年で建築百二十年を迎えた。

私は文芸散歩で訪れるまで国際子ども図書館については知らないことがほとんどで、大きく豪華な建物に緊張しながら足を踏み入れたが、中はシンプルな作りになっており、心をリラックスさせて図書館内を見学することができた。

入り口はレンガ造りの帝国図書館がそのまま使われている「レンガ棟」から入り、建物内奥側に進むと、近代的な構造が特徴のガラス張りになっている「アーチ棟」を見ることが出来る。



一階の「子どものへや」では、巨大な円形の卓を囲むように約一万冊の児童書が所蔵されてある。また、部屋内のライトが天井一面に張り巡らされているおかげで、どの場所で本を読んでも紙や手の影がでにくく、本を読みやすくする工夫がされていた。

二階には「児童書ギャラリー」や「調べものの部屋」があり、児童書ギャラリーでは、小学校で使用されている国語の教科書や、明治から現代を象徴する絵本、小説が展示されている。帝国図書館時代には、研究者や専門的な利用者のためや時には女性のための特別観覧室として使用されていたそうだ。調べものの部屋では中高生に向けた調べ物のための小さな図書館のようになっています。パソコンでの調べ物やや所蔵されている本の検索をすることも可能だった。

三階には「本のミュージアム」、「ホール」があり、本のミュージアムでは、様々な児童書がミュージアム内の展示塔にテーマに沿って展示されている。帝国図書館時代には男性が資料を利用するために使われる、普通閲覧室として使用されていた。ホールでは、イベントがある時は音楽会や催しが行われ、通常は帝国図書館時代からのこの図書館の歴史や活動が紹介されている。

国際子ども図書館は各部屋だけでなく、建築としても特徴があり、三階にあるラウンジには化粧煉瓦の壁に組み込まれた木製のサッシが、帝国図書館が設立された当時のまま、ガラス張りの中に保存されている。



国際子ども図書館の中には今回紹介したもの以外にも様々な部屋や建造物がある。場所によって感じられる雰囲気も内容も異なるため、ぜひ国際子ども図書館へ足を運んで、それぞれのお気に入りのスポットを見つけてみてほしい。



—東京国立博物館—

東京国立博物館の百五十年の歴史は一八七二年に東京・湯島聖堂大成殿で行われた博覧会から始まる。

文化財の収集・調査・修復を行い、展示を通してその成果を私たちに届けることで、日本文化の保護と継承を続けていくことを使命としている。

その収蔵品は現在では約十二万件を数え、そのうち国宝が九十件、重要文化財が六百五十二件と、質、量ともに日本を代表するコレクションだ。主にこれらの収蔵品や寄託品で構成される「東博コレクション展」では、常時三千件もの展示品が見られる。

加えて、東京国立博物館には異なる六つの展示館がある。日本美術、日本の考古、東洋美術、法隆寺献納宝物、黒田清輝作品をそれぞれ展示する五つの建物と、特別展や催し物会場とな



—正岡子規記念球場—

る表慶館で構成されていて、それぞれが別の時期に開館している。

日本の文化や守られてきた伝統に触れる施設として、一度訪れてみてはどうだろうか。

上野公園を歩いていると、美術館や博物館、動物園などの有名な施設が目に入る。その中を歩いていると、木々に囲まれた場所に「正岡子規記念球場」という名前の野球場が現れる。

球場は上野恩賜公園の豊かな緑に囲まれており、落ち着いた雰囲気だ。観客席は決して大きくはないが、長い年月にわたって

多くの人に親しまれてきたことが感じられる。

球場の名前の由来となった正岡子規は、明治時代を代表する俳人・歌人として広く知られている。しかし、実は文学だけでなく野球をこよなく愛した人物でもあった。学生時代にはこの上野公園周辺で友人たちと野球を楽しみ、自身も選手としてプレーしていたという。当時の日本では野球はまだ新しいスポーツであり、子規はその魅力に夢中になった一人だった。

さらに調べてみると、子規は「野球」と書いて「のぼる」と読む雅号（ペンネーム）を用いていたという。本名の幼名「升（のぼる）」とかけた名前であり、野球への強い愛着が伝わってくる。このことから、子規がベースボールを「野・球」（の・ボール）と訳したと勘違いされがちだが、「野球」と訳したのは中馬庚という、子規と同時期に



活躍した教育者である。それでも、子規自身もしっかり野球の普及にも関わっており、「打者」「走者」「直球」といった現在でも使われている野球

用語を訳したとされている。

そして、球場の近くには正岡子規をしのぶ句碑も設置されている。野球場のすぐそばに句碑が建っている景色は、日本でも珍しい光景ではないだろうか。

また、子規の野球への功績は後世にも高く評価され、2002年には文学者でありながら野球殿堂入りを果たした。選手や監督ではなく、野球文化の発展に貢献した人物として認められたことは、子規が日本の野球史に残した足跡の大きさを物語っている。

野球を愛した文学者が実際にプレーした場所に立ち、同じ景色を眺めていると、百年以上前の学生たちが白球を追いかける姿を想像してしまう。

正岡子規は俳句や短歌だけでなく、日本に野球文化を根付かせる一端も担っていた。その功績がこの球場の名前となり、現在も多くの人に語り継がれている。上野公園を訪れる機会があれば、美術館や動物園だけでなく、ぜひ正岡子規記念球場にも足を運び、その歴史に思いを巡らせてみてほしい。

―湯島天神 湯島天満宮―

湯島天神は文京区湯島三―三十一―にある神社です。学問の神様である菅原道真公を祀っていて、学問や開運のご利益がある。そんな、湯島天神の歴史と特に有名な菅原道真公について説明していきたいと思う。

湯島天神は四五八年（雄略天皇二年）に天之手力雄命（あめのたちからおのみこと）を祀って創立され、一三五五年（正平十年）に菅原道真公を合祀、一四七八年（文明十年）に太田道灌が社殿を再建、一五九〇年（天正十八年）に徳川家康が江戸入りに伴い崇敬などの歴史があった。

はじめに神様として崇められた菅原道真公の神霊への信仰を「天神信仰」と言う。これは菅公が火雷神と称され、雷神信仰と結びついたり、「天満大自在天神」の神号を賜ったことから神と崇められ「天神信仰」と呼ばれるようになった。

菅公が藤原時平に左遷され大宰府で亡くなった。その後、藤原時平を助けた人が死去や京都で天地変異などが次々と起き、しまいに宮中で雨乞いの協議をしていたところ落雷し、藤原清貴が死亡し負傷者も出るということがあった。まだ当時は、怨霊に



対する御霊信仰や雷神信仰が盛んだったため、菅公の怨霊の仕業ではないかと噂が広がった。これを信じた都の貴族は畏怖し恐れていたが、一般農民には必要な雨と水をもたらす雷神として、稲の実りを授ける神、めぐみの神といわれ信仰されていた。やがて、菅公の学問に対する偉大な事績やその人柄からは慈悲の神として崇められるようになった。

最初でも言った通り、ご利益では学問があり合格祈願の聖地として有名だ。そのため、受験シーズンには多くの受験生が合格のために訪れる。これを読んでいる方でご利益が欲しい方は訪れて、参拝することと、絵馬やお守りを買うことをお勧めする。本気の受験シーズンである一・二月に行くときと混んでいるため十一月・十二月など年中に行くときまだ空いていて待ち時間が減るのでおすすめ。ちなみに私が受験生のときはいけなかった。ただ、おすすめなのでこれを機会にぜひ行ってみてほしい。

さらに、梅の名所でもあり、白加賀を中心に約300本の梅の木が境内を彩る。文京花の五大まつりでもあり、本当にきれいだと思う。

今回は詳しく紹介できなかったが、このほかにも有形文化財に指定された表鳥居や、梅と牛が刻まれた装飾が見どころの唐門、頭を撫でると知力を授かれる撫で牛など、まだまだ魅力はたくさんあるので、興味があればぜひ一度訪れてみてほしい。



—旧岩崎邸庭園—

旧岩崎邸庭園は、東京都台東区池之端にある都立庭園。一八九六年（明治二十九年）、三菱財閥の創設者・岩崎彌太郎の長男、岩崎久彌の本邸として建てられた。設計は英国人建築家ジョサイア・コンドルが手がけ、園内には洋館、撞球室、和館が現存している。洋館には英国ジャ

コピアン様式の装飾が施され、和館や芝庭からは、明治時代の上流階級の暮らしや西洋文化の受容を知ることができる。現在は国の重要文化財に指定されている。

また、旧岩崎邸庭園は、明

治時代の西洋化を知るうえでも重要な場所だ。明治政府が近代化を進める中、岩崎家の邸宅にも西洋の建築や文化が取り入れられた。

一方で、和館や日本庭園も残されており、伝統文化と西洋文化が共存している。この和洋折衷の構成は、従来の文化を残しながら新しい文化を取り入れた明治時代の特徴をよく表している。



トリビア……高一で習う現代文「水の東西」に関連して、なんとここには池があるのに「ししどし」がない！是非行った際にはこの施設の水際を確認してみてもいい。

—おわりに—

今回、上野周辺の文化施設を巡り、それぞれの知見が広まったとともに、創作意欲も大変高まった。最後は湯島天神で学業のお願い事もしてきたことだし、成績に関してもきつと問題ないだろう。

最後に、引率から解説までを担ってくださった鶴田先生、途中置いて行かれそうになりながらも引率をしてくださった倉部先生に、この場をお借りして感謝したいと思う。

では、この有意義な時間に幕下ろすのは新部長の一言としようか。

「本日はお疲れ様でした、解散！」

上野 高校



「闇鍋のつくりかた」

1 参加者(推奨七名以上)を用意し、プロットシート、主人公の名前をもちよります。

2 プロットシートを順繰りに回し、

- ・ 主人公の名前
- ・ 主人公の得意／不得意
- ・ 主人公の目的
- ・ 目的に立ちはだかる敵や障害
- ・ 目的を果たそうとする理由
- ・ 敵と対立する理由
- ・ 目的を果たした主人公はどうなるか

という項目を一人ずつ埋めます。

3 このプロットシートを元に、作品を執筆します。

『眠眠打破』

おとり草氏

我が名は民々瀬見(みんなみんせみ)。アブラゼミだ。

来たるセミパラダイスに向け、ミン主義ミンミン共和国の再建を掲げ、自由ミン権運動を行っている。

……………ん？ ミン主義ミンミン共和国が何かって？

それはもちろん、ミンミンのミンミンによるミンミンのための政治のことだ。

ただ、再建といっても、現存する文献は少なく、ほとんど情報は残っていない。唯一わかっているのは、それは遙か昔に潰えた文明であることだけ。聞いたところによると、我々の地上における寿命五十二個ぶん、それも人間でいうところの、一年？ 前に栄えていたらしい。

ともかく、気の遠くなるような歳月が経っている。なんたつて私の寿命五十二個分なのだから、今からだと、ハワイが日本にたどり着いているに違いない。

「……………それに、今は非常事態だからな」

ことの重大さを忘れないように、木の蜜をチュルチュル吸いながら、独り言で自分に確かめる。なぜ、情報もない国の再建を目指しているのか。そして、なにが非常事態なのか。それは、脱皮歴百四十七前、予言者モーセミによる、

「ωとπの素数(?)が揃ったとき、大地より出でしセミの大群が、波のように地上を席卷する」

という予言の一節が、七日後、七月五日に訪れるらしい、などとまことしやかに囁かれているからだ。七月五日といえば、人間たちも気がでない様子で、その予言の信憑性を確かにしている。

「まあ！ そんな御託はどうでもいい！」

何はともあれ、どんな体制であろうとも、国の再建、そのためには、我々の権威を高める必要がある。すべての生物に、セミへの畏敬を植え付けるのだ。

幹から下界を見下ろしていると、麦わら帽子の少年が、我々を捕らえ監獄に閉じ込める兵器を片手にこちらに駆けてくる。虫取り網というらしいが、なんと恐ろしい響きだろうか。

だが、私はそんなものには屈しない。羽をバタバタと奮い立たせ、

視界の真ん中に少年を捉える。そして、

「ミーーーーーッ！」

と叫びながら少年めがけて突撃する。

『うわあっ!? アブラゼミがミンミン鳴いてる!』

少年はしりもちをついて後ずさると、手にしていた兵器、人間でいう虫取り網を放り出して逃げていった。そして母に泣きついている。

「ふはは! 私に恐れをなして逃げていったか!」

私は翻訳ができないので、互いに言語は通じないが、きっと私の姿を見て恐れおののいているに違いない。

……よし、では次の――

「――ガあ! ガあ!」

次の標的に向けて飛翔しようとした瞬間、我々の天敵が訪れた。黒い翼を広げ軍で行動する、悪魔のような奴だ。

「くっ! カラスか!」

ここは撤退しなければならない。あいつは災害のようなものだ。

私にはどうしようもない。中途半端なセミリタイアをすることになるのは癪だが、致し方あるまい。

「一時撤退とさせてもらおう!」

――そびえたつ木々に寄り添いながら、私は息を整える。辺りにはジリジリという鳴き声がそこから響いている。どうやら、ここには同朋が数多くいるらしい。

「……はあ。なんとか逃げられたか」

しばらくその場にとどまっていると、アブラゼミたちの様々な会話が聞こえてくる。

「ねえ、ヘアスタイルを変えてみたんだけど、どう?」

「……ん? おお! いいセミロングだね!」

「ふふ、あなたの筋肉もセミダブルで素敵よ!」

「さあ! セミ爆弾選手権も佳境に入ってます! 決勝戦はもう目の前! 準決勝はこの対決だあ!」

「足を閉じて、死んでいると思わせてから仕留めるのが最高なん

だよなあ！」

「俺はそんな卑怯なことはしない！……まだセミプロの未熟者だが、正々堂々足を開いてかかる！」

「いいぞー！ 樹液三滴賭けたんだ！ 負けるなよー！」

「セミファイナル（セミ爆弾）のセミファイナル（準決勝）だどー！？」

「万物は死に近づいていくと、神のお告げが聞こえたり、物事の真理にたどり着いたと錯覚することがあります。そして理解がとてもスムーズになったりしますね」

「せんせー！ 友達のツクツクボウシ君が、僕は特別な存在なんだ！ って言ってたけど、どういうこと？」

「ああ、そのような選ばれしセミが救われる、とか、自分が特別なセミであると考えろ。など、こういう思想のことをセ（シ）ンシン思想といって——」

……私には難しい内容を話している。最近の流行りというやつなのだろうか。ま……あ、楽しそうだから、良いことなのだろう。私も自分の使命を果たさなくては。

——そう思った瞬間、ケケケケケケケ、という鳴き声が周囲

に鳴り響いた。……………この声は——

「——ヒグラシ！？」

突然の新種に皆が注目したが、音の出所をみやると、そこにいたのはヒグラシではなかった。羽は茶色で、体は黒く、私たちに馴染みのある——

「アブラゼミじゃないか！」

「あつはは！ どーも！ 時代遅れの井の蛙ども！」

そのアブラゼミが羽をバタバタとしてこちらを煽ると、後ろから何匹、何十匹ものアブラゼミが出てくる。さらに、そいつらも一様にケケケケケと鳴いている。

「なんだと！？ われらの誇りを汚し、他の種族にうつつを抜かすなどありえない！」

「みんな落ち着け！ 仲間同士で争ってはいけない！」

「はん！ そもそもアンタ、アブラゼミのくせに民々瀬見てなんだよ！ おまえだって俺らと変わんねえだろ！」

「はあ！？」

同朋の視線が一瞬でこちらに向く。そして、先程まで彼らに向けていた目を私にもするようになったではないか。

「そうだそうだ！ こいつだってさきミンミン鳴いてたぞ！」

「なんですって！？」

「……っちょ……落ち着いて……」

議論の収集がつかなくなってきたころ、一つの単語が頭の中に浮かび、それによって私のすべてが腑に落ちた。

「……ああ！ これが民主主義か！」

やっと理解した。というか、簡単なことだったのだ。最初から、ミン主義ミンミン共和国は存在していた！

「ふははははは！ そうか！ これが真理！」

「………あいつは何を言ってるんだ？」

「………さあ………」

なんて晴れやかな気持ちなのだろうか！ このまま天にも昇ってし埋葬だ……！ ……ん？ ……あれ……なんだか、視界が定まらない……

「……ねえ、先生……」

「……ええ。そうですね……」

……なんだか眠たくなってきた。……ああ、

「眠……眠……」

一、主人公のプロフィール(名前、年齢、外見など)は？

民々 瀬見(みんな せみ)、アブラゼミ、地上に出て一日

二、主人公が好きなことは？得意なことは？

人が通りがかった瞬間に飛ぶこと。

三、主人公が嫌いなことは？苦手なことは？

鳴き声をかぶせてくるカラス。

四、主人公の目的(叶えたいこと、求めるもの)は？

ミン主義ミンミン共和国を作り出すこと。

五、主人公が目的を果たそうとする理由

かつて崩壊したセミのセミによるセミのための団体を再建し、

次の素数ゼミ(13・17年ゼミ)大量発生に備えるため。

六、主人公の目的に立ちはだかる敵(人、物、事態)は？

ひぐらしの切ない鳴き声で寝返るアブラゼミが出てくる。

七、敵が対立する理由は？

アブラゼミという尊い存在であるのにひぐらしとかいうセミ界の風上にも

置けない輩にうつつを抜かしている、と思うアブラゼミ

VS

お前ら視野が狭いんだよ井の中の蛙め大海を知るがいいひぐらしの声を

聴け、と思うアブラゼミ

八、目的を果たせたら主人公はどうなる？

また幸せなセミライフを送ろう……と思った矢先死ぬ。

最後までご覧頂きありがとうございます。今回も作品数が多いため、二冊立てです。こちらは上巻になります。

さて、今回の全体テーマは「記憶」でした。楽しい記憶、思い出したくない記憶……日々生きていれば色々あるものだと思います。皆さまの記憶に残る作品を目指して筆を進めた、私たちの作品はいかがだったでしょうか。

小説「お伽噺」では、誰もが一度は耳にしたことのある物語のオマージュ作品もいくつかありました。しかし、「お伽噺」と言っても、それどころかの誰かの人生でもあります。それぞれが描いた「お伽噺」を様々な視点から楽しんでいたければ幸いです。

詩「名前」では、名前が思い起こさせる誰かとの記憶や、その存在を映す作品が多く集まりました。同じ名前でも呼ぶ人によって響き方が違うこともあるでしょう。それぞれがそこに込めた思いを感じ取っていただけたらと思います。

短歌・俳句のテーマは「月」でした。古くから多くの人に歌や句に詠まれてきた月は、きれいな満月だけでなく、新月

だったり、はたまた雲に隠れていたり。同じ月を見ても、感じ方もそれぞれだと思います。皆さまにはどんな月が見えたでしょうか。

文芸散歩録では、一年生の新歓も兼ねて行った文芸散歩で巡った上野周辺の文化施設について、広まった知見を収録いたしました。本校文化祭からお帰りになる際に、是非立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

上高文芸部恒例の「闇鍋」では、実にカオスな設定の作品が生まれました。雑多な材料をぐつぐつ煮込んだ闇鍋を、どうぞご賞味あれ。

最後に、創文手帖文化祭号の制作にあたってお力添え頂きました顧問の鶴田先生・倉部先生と関係者の方々、そしてなによりこの部誌を手に取り読んで下さいました読者の皆さまに、心から感謝申し上げます。

部員一同

上野高校文芸部誌 創文手帳

令和八年度九月十二日 第一刷発行

◆ 筆者 上野高校文芸部

◆ 印刷・製本・発行 東京都立上野高等学校

東京都台東区上野公園一〇―一四

◆ 責任者 部長 岡歩未 副部長 及川万葉 渡邊暖真

◆ 顧問 鶴田靖浩 倉部康 瀬治山大

落丁本、乱丁本はお取替えします。その他のお問い合わせについても上野高校の文芸部員にお声がけください。

本著を無断で模写転載、販売することはかたくお断りします。